

第2表 出土遺物(土器)観察表

番号	遺構 出土位置	器種	口径 (mm)	器高 (mm)	底径 (mm)	調整(外)	色調(外)	残存率	備考
						調整(内)	色調(内)		
2	3区 遺構検出	土師器 内黒有台焼	—	250	760	ナデ	7.5YR8/2灰白	底部1/4	
						ナデ	2.5Y4/1黄灰		
3	4区 P86	須恵器 坏蓋	1000	170	—	ロクロナデ、 ヘラケズリ後ナデ	5P06/1青灰	1/3	
						ロクロナデ	N7 灰白		
4	4区 SD74	青磁 碗(口縁)	1480	290	—	—	10Y6/2サーブ灰	口縁部1/9	
						—	10Y6/2サーブ灰		
5	4区 垂機掘削	縄文土器 深鉢	—	310	—	条痕方向斜位	7.5YR7/3c.灰・橙	小片	
						ナデ	7.5YR6/3c.灰・褐		
9	2区 P221	土師器 内黒有台焼	—	150	—	ヨコナデ、 回転ヘラ切り後ナデ	5YR7/4c.灰・橙	底部1/4	
						ミガキ	10YR3/1黒褐		
10	2区 P146	土師器 内黒有台焼	—	210	—	ヨコナデ	7.5YR6/4c.灰・橙	底部1/2	高台径78mm
						ミガキ	10YR4/1黒灰		
12	2区 遺構検出	弥生土器 釜(口縁)	1880	470	—	ナデ、楔形削7条	7.5YR7/4c.灰・橙	口縁1/12	煎茶鉢径123mm 外面口縁部～胴部の一部に縦付条
						ナデ	7.5YR7/4c.灰・橙		
13	2区 遺構検出	土師器 有台焼	—	180	—	ヨコナデ、高台内部回転 糸切り、ヨコナデ	7.5YR7/4c.灰・橙	底部4/9 休部小片	
						ヨコナデ	7.5YR6/4c.灰・橙		

すえまつい せ き
末松遺跡

報告書抄録

ふりがな	すえまついせき									
書名	末松遺跡									
副書名	野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書2									
編者名	西村 慈子、畠 麻由美									
編集機関	野々市市教育委員会									
所在地	〒921-8510 石川県野々市市三納一丁目1番地 Tel:076-227-6122									
発行機関	野々市市教育委員会									
発行年月日	西暦 2023年3月27日									
アフリカ	アフリカ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号							
スエマツイ 末松遺跡	石川県 野々市市 中林・末松	17344	1205800	36° 50′ 70″	136° 59′ 82″	平成29年10月10日～ 平成29年11月22日	759	記録 保存 調査		
	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物				
要 約	集落	縄文・弥生・古代 中世・近世		掘立柱建物、 小穴、溝		縄文土器、弥生土器、須恵器、 土師器、青磁、石器				
	末松遺跡は、古代、中世の集落遺跡である。本調査区では、中世の掘立柱建物を2棟検出した。遺物は縄文から近世以降まで幅広く出土した。									

2023年3月27日 発行
野々市市中林土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書2

末松遺跡

著作権所有 石川県野々市市三納一丁目1番地
発行者 野々市市教育委員会
印刷者 石川県能美郡川北町土室か16番地1
高桑美術印刷株式会社

2023

石川県野々市市教育委員会

例 言

- 1 本書は、末松遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、石川県野々市市中林三丁目地内である。
- 3 調査原因は、野々市市中林土地区画整理事業施行地区内14号水路（報告書刊行時点）整備である。
- 4 調査は、野々市市中林土地区画整理組合（以下事業者）からの依頼を受けて野々市市教育委員会文化課（当時）が実施した。
- 5 調査にかかる費用は、事業者と野々市市が負担した。
- 6 現地調査は、文化課（当時）職員 西村慈子が担当し、平成29年10月～11月に行った。調査面積は759㎡である。
- 7 報告書執筆・編集は、野々市市教育委員会生涯学習課職員 西村慈子、畠山由美が担当した。
- 8 現地作業は、株式会社太陽測地社に支援業務を委託した。
- 9 本書についての凡例は以下のとおりである。
 - (1) 方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅱ系に準拠している。
 - (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.（東京湾平均海面標高）による。
 - (3) 出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
 - (4) 挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺はS ≈ 1/3 である。
 - (5) 土層図・遺物観察表の色彩注記は、「新版標準土色帖」に拠った。
 - (6) 遺構名称の略号は以下のとおりである。なお、遺構番号については調査時のものを報告書作成段階で一部変更している。
- 10 調査に関する記録と出土遺物は、野々市市教育委員会が一括して保管・管理している。

第1章 位置と環境

第1節 遺跡の位置

野々市市は石川県のほぼ中央に位置し、北東部を金沢市と南西部を白山市にそれぞれ接している（第1図）。東西4.5km、南北6.7km、面積13.56km²と狭いものの、人口は令和2年10月時点で57,238人であり、年々増加している。

野々市市は白山から流れる県下最大の河川である手取川によって形成された扇状地（手取川扇状地）の扇央部から扇端部に位置している。標高は最高49.6m、最も低い地点で8.4mであり、南から北に緩やかに傾斜している。手取川は幾度も流路を変えながら大量の礫を含む土砂を運搬しており、手取川から分岐する中小河川によって南北に延びる微高地が形成されている。現在の七ヶ用水と総称される流路はその名残を示すものであるといわれており、その1つである郷用水の中流域に本遺跡は位置する。



第1図 野々市市位置図

第2節 歴史的環境

末松遺跡周辺の歴史的環境については、周辺の調査報告（柿田ほか2005）および野々市町史に詳しい。詳細はこれらに譲り、ここでは概要を述べるにとどめる。

縄文時代から弥生時代までの遺跡は、手取川扇状地の扇端部を中心に集落が形成される。末松遺跡の周辺では、北西に約2kmはなれた長竹遺跡や乾町遺跡などで縄文晩期の遺構および遺物が見つかる。古墳時代においても、市北部では御経塚シンデン古墳群をはじめとした古墳や集落が展開するが、扇央部ではあまり確認できていない。



- | | | |
|-------------|----------|--------------|
| 1. 清金アガノ遺跡 | 7. 古元堂館跡 | 12. 末松館跡 |
| 2. 末松信遺跡 | 8. 末松C遺跡 | 13. 末松館跡 |
| 3. 末松福正寺跡 | 9. 末松古墳 | 14. 法福寺跡 |
| 4. 末松ダイカン遺跡 | 10. 末松館跡 | 15. 末松しりわん遺跡 |
| 5. 末松B遺跡 | 11. 末松遺跡 | 16. 上林イシガネ遺跡 |
| 6. 末松庵寺跡 | | |

7世紀後半に入ると、人々の生活拠点は扇央部に拡大する。七ヶ用水に挙げられる郷用水、富樫用水、中村用水などの中流域で集落が形成され、その中心となったのが末松遺跡である。末松遺跡では、近江や丹波といった系統の土師器煮炊具が出土している。このことから、扇央部での開発は移民によって本格的に開始されたことが指摘されている。（柿田ほか2005）また、本遺跡の西方には、7世紀後半に創建された北陸地方最古級の寺院である末松庵寺跡が所在する。本遺跡を含む扇央部の開発は、末松庵寺跡の建立に大きな影響があると考えられる。

中世の遺跡は、本遺跡の北側に近接する清金アガノ

第2図 遺跡分布図

トウ遺跡で13世紀頃の集落を確認している。そのほか、近隣地には末松信濃館跡、古元堂館跡といった館跡が存在するが、本格的な発掘調査は行われていないため詳細は不明である。

第2章 経緯と経過

本書で報告する平成29年度に実施した末松遺跡の発掘調査は、野々市市中林土地区画整理事業施行地区内14号水路（報告書刊行時点）に起因するものである。

平成29年度4月12日付で野々市市中林土地区画整理組合より発掘調査の依頼を受け、4月13日付教文第22号により発掘調査を実施する旨を回答した。また、9月27日付教文第299号により文化財保護法93条の規定による土木工事等のための発掘通知を石川県教育委員会宛に到達した。

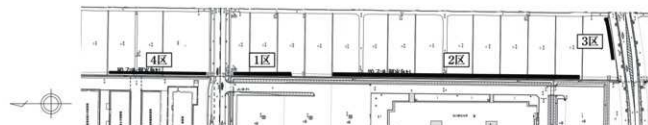
平成29年10月10日より現地調査を開始した。調査区は幅約3m、南北約350mと細長い形状であり、また、天候不順も懸念されたため、調査が完了した場所から順次空中写真測量を実施し、11月22日に現地調査を終了した。

整理作業は、調査終了後に遺物の洗浄、注記、接合および実測を行った。令和4年度に報告書作成を行い、令和5年3月に刊行した。

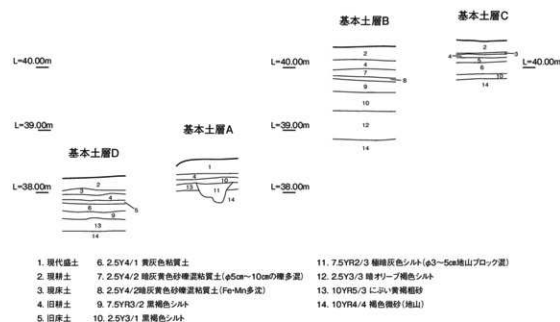
第3章 調査区と基本土層

本調査区は、水路工事に伴うものであるため、細長い調査区の設定となる。調査区は東西に横断する市道額谷末松線や重機掘削の段階で地形が落ち込む鞍部を数か所確認したことで、当該箇所は調査対象外とした。この市道や鞍部を除いた調査区を調査順に1区、2区、3区とし、市道より北側を4区に設定した（第3図）。

基本となる層序については、各調査区から1ヶ所ずつ抽出し、A～D地点とした（第6～10図）。上面から現代の耕作土および床土、旧耕作土および床土、中世の遺物包含層、古代の遺物包含層、地山となる。中世の遺物包含層は黄灰色～暗灰黄色の粘質土、古代の遺物包含層は黒褐色～黒色のシルトである。鞍部では暗オリーブ褐色シルトの層土を確認している。検出面となる地山は褐色の微砂であり、北に向かって地形が落ち込む。



第3図 調査区配置図



第4図 基本土層図

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構

検出した遺構は、小穴が大半であり、そのほか掘立柱建物、土坑、溝を確認している。また、遺構分布に粗密が認められ、2区北半や3区では遺構密度が高いが、4区や2区南半では遺構が減少する。

検出した遺構のうち、遺物が出土しているものはわずかであるが、古代から中世の遺構を確認することができた。以下、主だった遺構について報告する。

掘立柱建物

SB1 (P23・P27・P44・P49) (第5・7図)

1区北側で検出した。柱間約1.5mを測り、柱穴は径70cm前後、深さは30～50cmである。南北方向は3間の建物であるが、調査区が狭く東西方向の延びは検出できなかったため不明である。建物の方位は東に8°振る。

SB2 (P42・P31・P48・P46) (第5・7図)

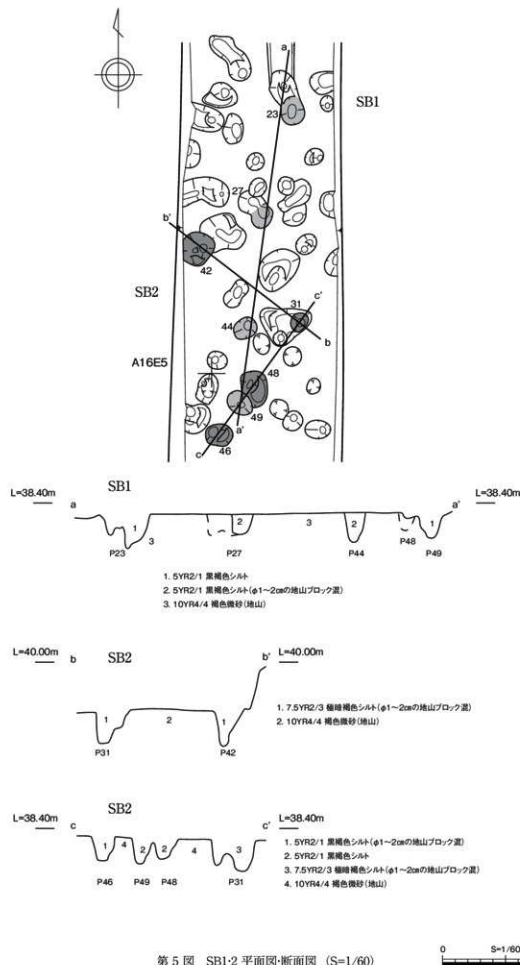
1区北側で検出した。柱間約2mを測り、柱穴は径50cm前後、深さは35～50cmである。建物は調査区の北西方向に延びていき、2間×1間以上と考えられる。建物の方位は西に52°振る。

溝

SD1 (第6図) 4区北側で検出した。東西方向に延びており、幅80cm、検出面から深さ41cmである。

SD114 (第6図) 4区北側で検出した。東西方向に延びており、幅112cm、検出面から深さ37cmである。

SD1・SD114はほぼ平行するかたちで検出されており、両遺構間には小穴等の遺構は確認されていない。過年度の周辺の調査では、道路跡と考えられる遺構が確認されており（北野1989）、この2つの溝も道路跡に伴う側溝の可能性が考えられる。この両溝が道路側溝と想定した場合、溝間の路面幅は約2.4mである。



第5図 SB1-2 平面図・断面図 (S=1/60)

第2節 遺物

遺物は縄文時代晩期から近世まで、コンテナ1箱分出土している。ここでは、実測した出土遺物を時期ごとに説明する。

縄文時代～弥生時代

縄文時代晩期から弥生時代後期の土器片および打製石斧が出土している。縄文土器は、晩期の深鉢の小片であり、4区の重機掘削時に出土した(第11図5)。弥生土器は、甕の口縁部の一部が2区遺構検出作業の際に出土している(第11図12)。外面口縁部から頸部にかけて一部煤が付着していた。

打製石斧は4点出土しているが、完形のものはない(第11図1、7、8、11)。2区のP105から出土した打製石斧は、後世に砥石などに転用した痕跡がみられる(第11図11)。

古代

古代の遺物は、須恵器と土師器片が出土しているが、ほとんどが小片であったため、5点のみ実測した。須恵器は、4区のP86から坏蓋が1点出土した(第11図3)。時期は8世紀末～9世紀前半にあたる。土師器は実測した4点すべて有台であった(第11図2、9、10、13)。また、そのうち3点(第11図2、9、10)は内面黒色処理が施されており、9世紀ごろと考えられる。

中世～近世以降

中世の遺物は、4区のSD74から青磁碗の小片が出土している(第11図4)。口縁部が外反しており、14世紀ごろと考えられる。

近世の遺物は、4区のSD44から近世以降の瓦片が1点出土している(第11図6)。

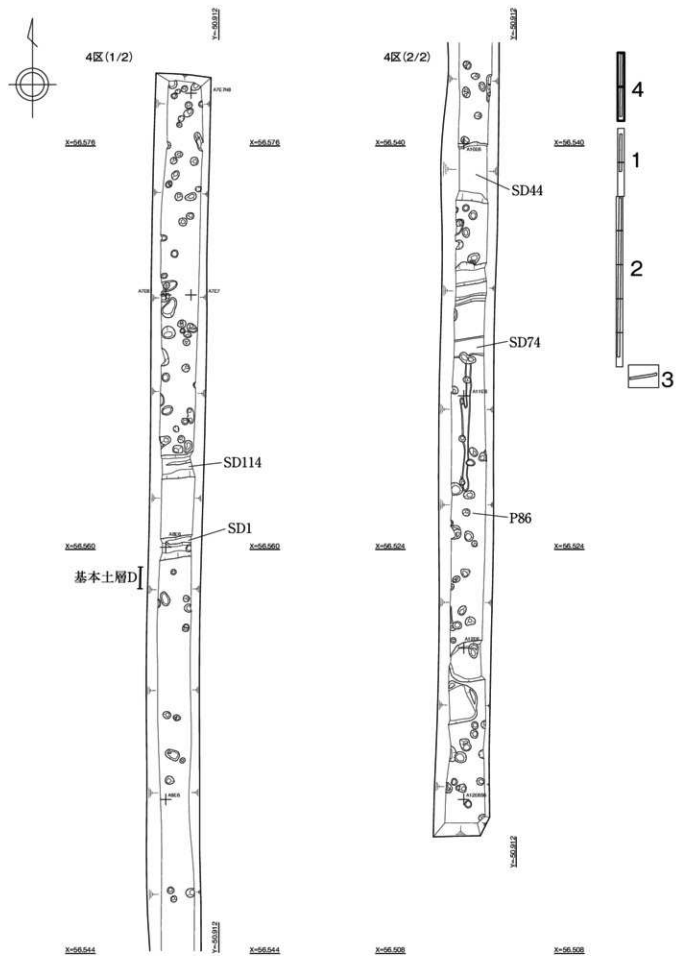
第5章 総括

本書において報告した調査地点では、多くの小穴を検出した。その中で、柱穴と認められるものは8個で、掘立柱建物の数は2棟であった。柱穴の形状から時期は中世と推察されるため、掘立柱建物を検出した1区周辺は当該時期の集落と考えられる。ただし、今回の調査区が細長いものであったため、集落の詳細な様相をうかがうことはできなかった。また、遺構の集中する2区北半や3区では、深さ30～50cmの小穴が多く検出されたが、建物として組み合う柱穴は見つけられなかった。

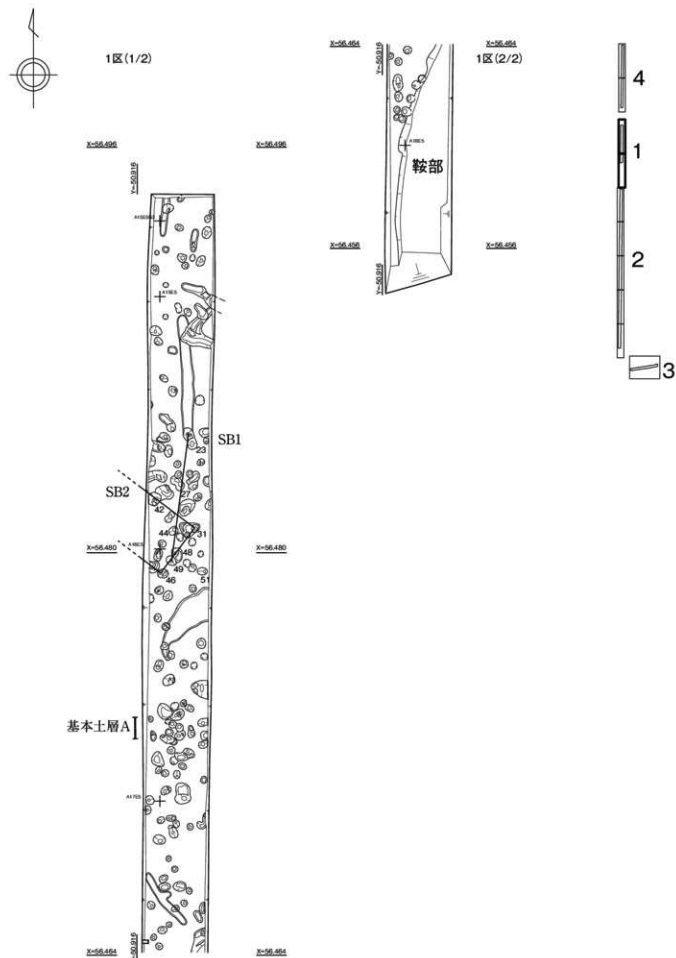
末松遺跡の発掘調査は、野々市市中林土地地区画整理事業において継続していく予定である。当該時期の集落の様相については、今後の調査で再検討したい。

(参考文献)

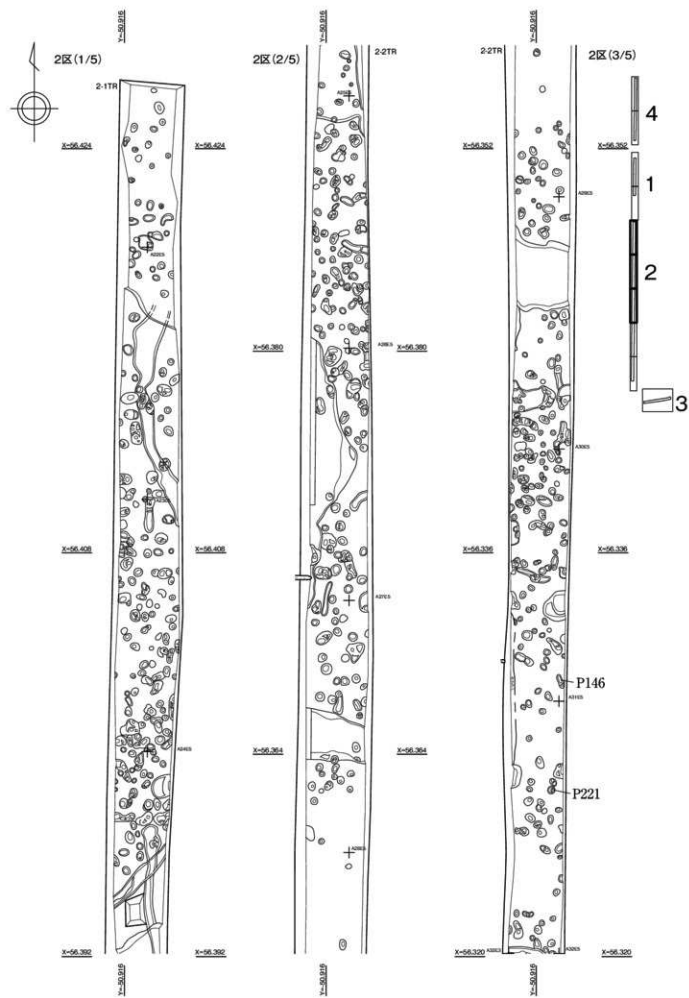
- 柿田祐司ほか 2005『野々市町末松遺跡 一般国道157号鶴来バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
石川県教育委員会 (財) 石川県埋蔵文化財センター
- 北野博司 1989『末松遺跡 石川県農業短期大学附属農業資源研究所増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
石川県立埋蔵文化財センター
- 郷地孝大 2017『末松遺跡 ふるさと農道緊急整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 野々市市教育委員会
- 西村恵子 2023『末松遺跡 野々市市中林土地地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』 野々市市教育委員会
- 山田由希ほか 2016『野々市町末松遺跡 石川県立大学整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
石川県教育委員会 (財) 石川県埋蔵文化財センター



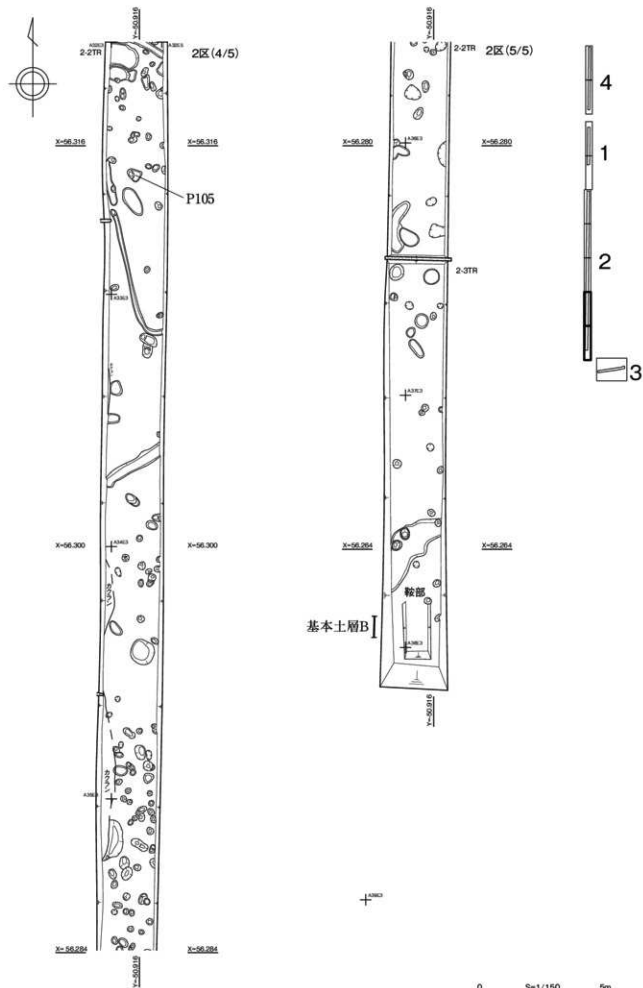
第6图 4区平面图 (S=1/150)



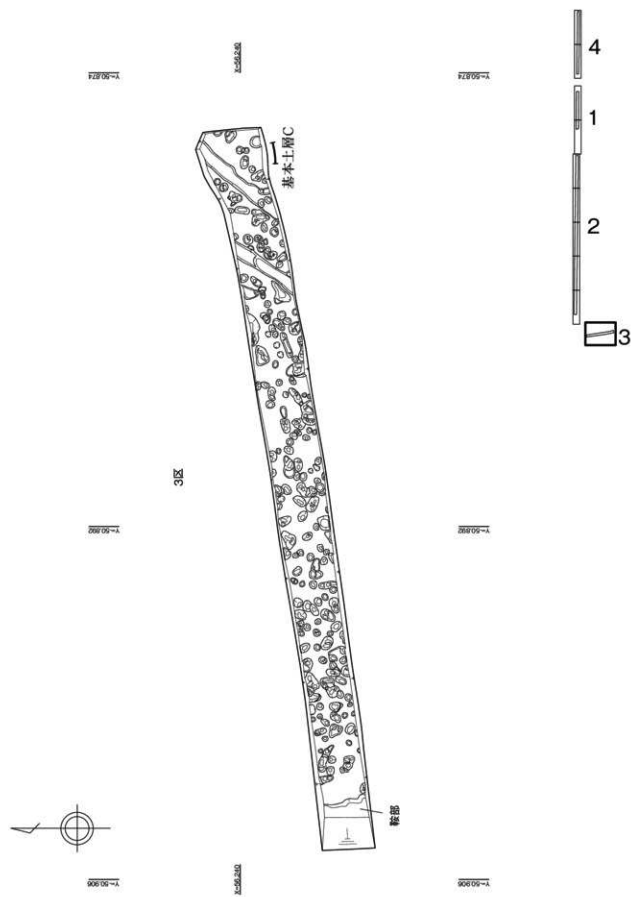
第7图 1区平面图 (S=1/150)



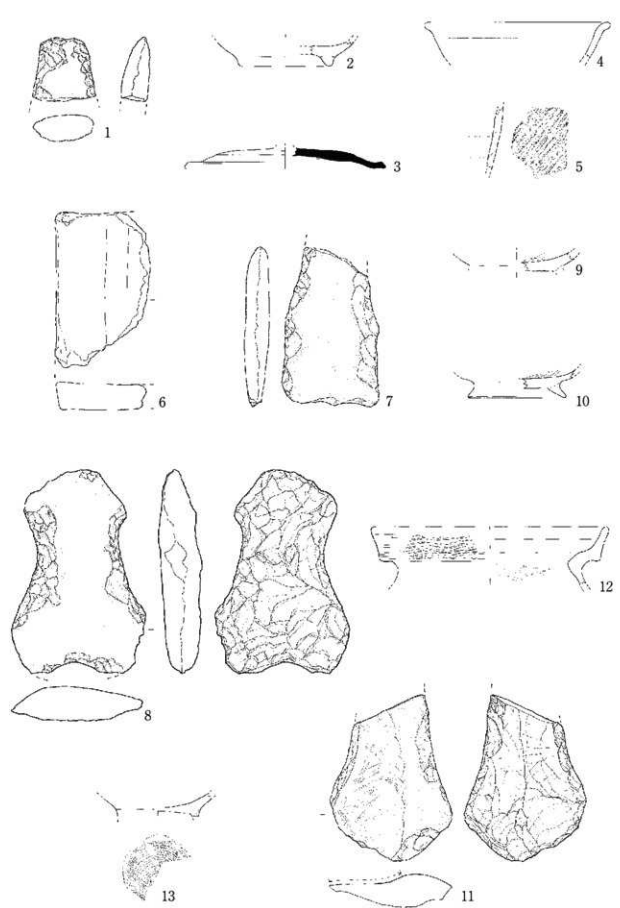
第8图 2区平面图1 (S=1/150)



第9图 2区平面图2 (S=1/150)



第10図 3区平面図 (S=1/150)



第11図 遺物実測図 (S=1/3)



1区 完掘状況 (南から)



1区 SB1-SB2 完掘状況 (南から)



2区 北側完掘状況 (北から)



3区 南壁西端部



3区 検出状況 (東から)



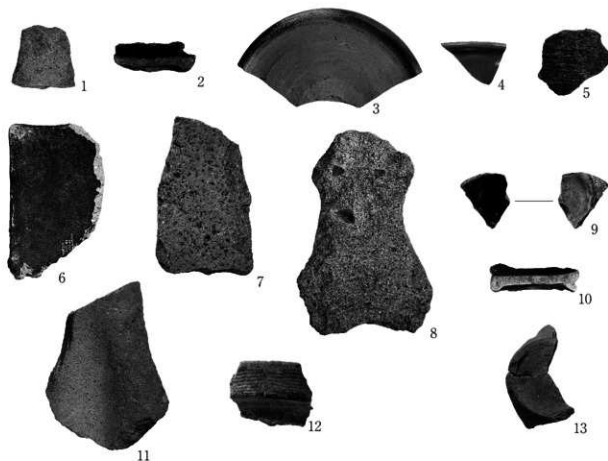
4区 検出状況 (北から)



4区 西壁土層断面



4区 SD1-SD14完掘状況



出土遺物

第1表 出土遺物(石製品・瓦)観察表

番号	遺構	部種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石 材	備考
	出土地点							
1	1区	打製石斧	51	51	23	63.8	砂岩	下部欠損
	PS1							
	4区							
6	SD4	瓦	123	76	22	222	—	近世以降
	2区 or 3区							
7	検部埋土	打製石斧	136	77	19.5	237	安山岩	
8	2区 or 3区	打製石斧	162	107	35	580	凝灰岩	
	検部埋土							
11	2区	打製石斧	132	97	35	392	砂岩か	
	PH5							